

障害児保育における親の参加について

著者	鈴木 裕子, 金平 文二, 巷野 悟郎, 後藤 嘉余子, 芝辻 益子, 上野 己美子
雑誌名	東京家政大学研究紀要 1 人文社会科学
巻	30
ページ	81-87
発行年	1990
出版者	東京家政大学
URL	http://id.nii.ac.jp/1653/00008820/

障害児保育における親の参加について

鈴木 裕子*・金平 文二*・巷野 悟郎*・後藤嘉余子*
芝辻 益子**・上野己美子**・

(平成元年9月30日受理)

Participation of the Parents in the Nursing of Handicapped Children

Yuko SUZUKI*, Bunji KANEHIRA*, Goro KONO*,
Kayoko GOTO*, Masuko SHIBATUJI** and Kimiko UENO**.

(Received September 30, 1989)

I はじめに

発達上の問題をもつ子どもの養育の過程は障害の程度や内容によって様々であり、一人一人の特性に応じた個別の関わりが必要さが指摘される。子どもの発達の遅れに対する母親の気づきは、同年齢児との比較や兄弟姉妹の発達経過との対比によって漠然とした不安と共に自覚される。更に、乳幼児検診において問題点を具体的に示され認識するという場合が多いと考えられる。

母親にとって問題認識の糸口ともなる健診システムは自治体により若干時期を異にはするものの、一般に一カ月検診に始まる乳児健診から一歳半健診、三歳児健診といった発達の節目にあたる時期に実施されている。殊に、乳児検診では身体・運動発達等が中心となっているのに対し、その後健診ではこれらに加え言語発達・対人行動上の問題など、精神発達面のチェックが合わせて実施され、発達初期からの問題への対応がはかられるように配慮されている。身体発育上の問題は乳児期に顕在することが多いので乳児検診時よりフォローされているが、発達の遅滞や多動及び自閉傾向などの問題は、幼児期の健診において顕著に認められる傾向がうかがえる。従って、母親の主訴もこのような内容に関する事柄が多く提起されるようになって来る¹⁾。その中には一過性の問題として子どもへの関わり方の調整で解決に至るケースも認められるが、子どもまたは母親の問題に継続的な援助が必要な場合もあり、そのような時は指導施設へと引き継いでより効果的な指導が受けられるよう配慮する必要がある。

* 児童学科

** 児童学科わかくさグループ

当わかくさグループの子ども達も、このような経過措置のもとに保健所を通して来室してきたケースである。子どもの問題の背景には母親との関係や養育環境上の問題が錯綜していることが多く、母親の主訴や子どもの問題行動そのものへの治療的なアプローチと共に、問題の背後にある事柄を調整する必要性もあるといえよう。

このような現状をふまえ、当グループでは従来より母親が問題の理解や対応の仕方を学習する場としても機能しうよう、母子同室という形で治療保育に取り組んできた。即ち子どもの遊びを中心とした保育の実際を体験し、問題の理解と具体的な関わり方を体得することをねらいとしてすすめてきた。また父親参観日を設け、父親の理解と協力を求めて家族の協力体制を強化するという方向でも活動を続けてきた。こうした働きかけの結果として、親の障害に対する意識の変容や子どもへのかかわり行動の変化等が少なからず見受けられ²⁾、母子同室の意義並びに父親参加の必要性が明らかになった。そこで今回は更に子どもの成長・発達が、親の子どもの問題に対する理解と接し方にどのように反映されているかという点について検討を行った。子育ては親と子の相互作用により成立するものであり、しかもその質的側面が問われている。問題の理解度や実際の関わり方が発達を助長する要因にもまた阻害する要因にもなりうるであろう。発達上の問題を呈する子どもについて、発達を援助すべき親の意識や行動と子どもの発達の側面との関係を明らかにすることは、今後、小集団グループにおける障害児保育のあり方に何らかの示唆が得られるものと考えられる。また子どもへの関わりや援助活動に関する模索も、受け手であり発達主体としての子どもを側面より援助する上で

重要な意義をもたらしようと期待できよう。

II 方法

ことばの遅れを主訴として入室してきた7名（男児5名、女児2名）の幼児を対象とした。入室後の指導上の手がかりを得る為と子どもの問題点を明確に把握するという目的から入室前にはテスト入室を行い、グループ活動が可能かどうかをセラピストが判定する。入室が決定した段階で医師が成育歴、医学面のチェックを行い、同時に子どもの現状と問題点を明確化するための面接と、遠城寺式乳幼児分析的発達検査を実施して子どもの発達状態を把握する。更に入室時及びグループに参加後の子どもの様子を言語・行動・運動等について項目別に記録する。また母親には日常の成長記録をとるよう求め、父親については参観時の保育や懇談会の記録を集録し、感想文を提出するよう依頼した。

III 結果および考察

対象児について入室時の面接資料や発達検査の結果および成育状況等について、個々のプロフィールを示したものが表1である。

いずれも「ことばの遅れ」を主訴としているものの、入室年齢をはじめ成育状況や発達の状態は様々であることが理解できる。入室年齢は2歳5カ月から3歳3カ月

に及び、性別では男児が5名、女児が2名となっている。2歳5カ月、2歳6カ月と比較的年月齢が低い時期より入室しているのはいずれも女児であり、男児の入室年齢が比較的高くなっている点は着目する必要がある。つまり、「男の子は“口が遅い”と一般に言われているので気にしていなかった」という入室時の母親の発言にも表われているように、一般通念を反映しており、そのうちと思う気持ちが入室を遅らせる一因となっているものと推察される。このことから、母親の問題意識の持ち方として女児の場合には比較的早期に言語発達の遅滞に気づきやすいが、男児の場合には遅れの気づきや対応が遅くなる傾向にあるという点が指摘出来よう。また、「ことばの遅れ」をいずれも主訴とはしているものの、全体的な発達の遅れによる言語発達の遅滞を示すケースや、生活経験や不十分な成育環境に起因する言語発達の遅滞、または対人行動上の問題を伴う言語発達の遅れなど、子どもの現状やその背景は様々であることがうかがわれる。母親の主訴は同一であっても問題の根底にあるものは異なるといえよう。しかし、言葉の遅れを主訴として提起する母親の心情的な面を考えると、発達遅滞を認めたくないという思いや発達そのものの理解が不十分であったり、またそのうちに普通の子どもに追いつくであろうという期待感があるように思われる。複合的に問題を抱えている場合でも主訴としては「ことばの遅れ」となって

表1 対象児の特性

対象児	性別	入室時 年齢	家族構成	主訴	既応症	備考
A男	男	2:11	父、母、姉	ことば の遅れ	水痘、耳下腺炎	出生時、黄疸の為光線照射 (3~4日)
B男	男	3:5	父、母、姉	〃	水痘	妊娠6カ月頃、切迫早産の傾向あり
C子	女	2:5	父、母、祖父母(父方) 祖母(母方)	〃		
D子	女	2:6	父、母、姉	〃		切迫早産防止の為6カ月より 投薬、出生時チアノーゼ有
E男	男	3:1	父、母	〃	はしか	チアノーゼ軽度、生理的黄疸、 1歳半でけいれん(腿被OB)
F男	男	3:3	父、母、弟	〃		
G男	男	3:2	父、母、妹	〃	はしか、風疹	妊娠中早期破水有り、生後6 カ月で発熱、點頭てんかん、 幼少時より入退院の生活が続く

いる点は興味深い。また、「ことばの遅れ」に附随して対人行動が未発達であったり、特異な行動傾向を示すケースにも留意すべきであろう。いわゆる「自閉的傾向」であるが、まだ年齢的に行動の偏りが見受けられたり、他の子どもと少々違っているといったズレが自覚される程度である為、知的側面との関係が深いと母親が理解している「ことばの遅れ」にのみ着目されるのではないかと考えられる。従って、入室時の主訴に着眼しながらも個々のプロフィールに留意し、行動の観察を通して母親が主訴として呈示していることばの遅れにとらわれず、行動の偏りや遅滞のみられる他の側面についても徐々に母親の理解を深め、本質的な問題の把握がなされるよう援助していかなければならないと思われる。

次に子どもの入室時の状況とその後発達の経過について概観してみたい。

主訴であることばの発達の变化及び行動の変容や遊びの様子について具体的な行動を中心にまとめたものが表2である。有意味語の発語が認められなかったB男・C子・D子・E男・F男・G男はグループ活動への参加に伴い、不十分ながら発語がみられたり、返事をするなどの变化が着取出来る。また、表情が堅い、反応が少ない、笑顔がみられないなどといった状態から、表情に变化が表われ、笑い声（顔）がよく出るようになったなど感情表出がスムーズになるといった变化が認められる。また、発音の不明瞭さは残るものの、単語を少し話す程度であったA男も言葉の量的な増加が見受けられる。これらの变化と合わせて、多くの場合、人との関わりが閉鎖的・拒否的であった状態から、相手の反応を試したり接触を楽しみ、また、同室の子どもや母親達にも関心を示し、時には自分から関わりを求めて初期的なやりとりがみられるようになっていく様子がうかがえる。即ちコミュニケーションの手段としての言語機能が発揮されてきたといえよう。このことは初期の「ボーとしている状態」や無目的な行動から目的々に行動するように変容していく過程からも理解できる。また、遊びについても、一人または母親と共有していた段階から、他児との関わりをもち、遊具を介して同じような遊びを模倣するようになるといった变化が認められる。これらは、単なる一過性の言語発達遅滞を呈する子どもの場合には入室後比較的早期より顕著に認められるが、自閉傾向がある子どもや発達遅滞を呈する子どもの場合は徐々に変化していくので長期的な指導が必要であると思われる。また、いずれの

場合も、自宅近くに遊べる子どもがいないという状況や閉鎖的な生活を送っていた母子が集団への参加という環境の変化によって刺激を受け、それが行動を起こす契機になったことも一因であると考えられる。飛躍的な変化は望めないまでも、日常の生活空間と異なる場面に對し構えの強い自閉傾向のある子どもは、環境を自分の中に取り込むまでに時期を要し、一定の行動パターンからの脱却が困難で、安心できる場として認識するまでにより多くの時間を必要とするのであろう。また遅滞傾向のある子どもは新しい場面への適応が困難である点が反映される為と推察される。

表3は母親の入室時の状態とその後子どもへの関わり及び子どものとらえ方と、父親の参観時やその後関わりやとらえ方について示したものである。

概して、場への不慣れな状況と相俟て、入室頭初の母親はいずれも不安な状態にある様子がうかがえ、子どもにどう関わっていったらよいかかわからない状態で、迷いや焦り等が見受けられる。しかし、次第にグループの活動に意欲的に参加するようになると、セラピストや同様の悩みをもつ母親とのコミュニケーションを通し安定感や自信または意欲をもち、子どもの現状把握と問題の認識が冷静になされる。自分の子どもの成長・発達についての見通しをたて、子どもがどのように成長・発達を遂げていくかその過程をとらえる視点をもつことができ、無意味な他児との比較による不安感や焦燥感は少なくなっていく様子が推察される。更に、母親の行動を動機づける要因として、現状をとらえ今どうすべきかを考え行動できるようになっていく過程も理解出来る。この点こそ相互作用を有効に機能させる上で最も大切なことであるといえよう。セラピストとの信頼関係が確立され、適切な助言と支持を得ると共に、同じような痛みをもつ母親同士のコミュニケーションが保育活動を通して実現し、自らの行動をフィードバックすることも可能となり、これらが有機的に作用して母親の安定へとつながり、子どもの成長・発達を促す活動を生み出し、行動化をはかっていくものと推察される。一方父親についてみると、子どもの治療グループへの参加が父親に意識の変革をもたらしている点がうかがえる。子どもとの接触時間が短いこともあって問題の認識が困難であり、母親の話を通して不安ながらもどうにかなると思っていた段階から、明確に子どもの問題について考える機会に直面し、現状を理解していこうとする姿勢が形成されつつある状態がう

表2 入室時の状況及びその後の経過

対象児	入 室 時		経 過		
	こ と ば	行 動	こ と ば	行 動	
A男 DQ = 88	発音は不明瞭ながら単語を少し話す。自分の要求が相手に理解されないとひっくり返っておくる。	相手をすれば母親と離れる目は合わせようとし、他の子どもの動きにも関心をみせず、マイベースの動きが多い。また1つのことを集中して行うことは少なく興味は次々と移る。	ひとり遊びが多く、遊具を用いて身体を使った遊びが多い。トランポリンや三輪車などを好んでいる。しかし、指先の力は弱く鉄棒などを握ることは不十分である。	発音は明瞭ではないが単語で話すようになる。最近、大きな声がよく出ている。要求が通らない時も話してなだめるとおさまるようになってきている。笑顔が多くなっていった。	目は合うようになる。Tの指示に合わせた行動がとれるようになってきた。母子分離はできるが、反面母の後を追うようになった。他、児の動きにも関心を示すようになった。特定の玩具への固執もみられなくなった。
B男 DQ = 80	ほとんど声を出さない。表情がかたかく、笑顔はほとんどみられない。	目的な行動はとれないが多動ではない。手先の細かい運動は困難。やる気にかける。くすぐっても反応がない。人と目を合わせない。母親と離れても全く気にしない。相手をしても関心を示さない。	部屋の中をフラフラと動きまわっている。遊びがことはない。一人遊びが多い。	部屋では殆んど出ていないが、家ではかなり単語数が増えているとのこと。大きな声が出てきている。照れながらも相手をすればよく笑うようになり、表情が豊かになってきた。くすぐると大きな声で笑う。接触を楽しんでいる様子が見える。	遊びに熱中していても集まりを始めるに参加でき、その後また中断した遊びに戻るなど行動の転換ができるようになってきている。目もチラリと照れたように合せる。母親との分離ができなくなった。いらいと泣いて探す。相手をするとわざと物を投げたりやりとりを楽しみ相手の様子を見がっている。
C子 DQ = 53	声を出すが、名前を呼んでも反応しない。	目を合わせようとするとき合わせない。あつめられるか焦点が合わない。表情も少ない。足腰もおぼつかず。かけ足は出来ない。早歩きもきこちない。何事もやらされて参加するといった様子である。人の関心はほとんどみられずボーとしていることが多い。声をかけ顔を近づけるとゆっくり反応する。	部屋の中をフラフラとしており、相手をしないや何もしない。相手をすると身体を動かして遊ぶ。何事もやらされてやるという程度。カラートンネルにも入れられるが、途中で寝てしまいがちである。	声を出すがまだあまりないが、名前を呼ばれると反応を示すようになってきた。	声をかけた相手を見る反応が早くなりじつとみつめるようになってきた。自分から相手を求める行動は少ない。また相手するも表情の変化に乏しい。くすぐったりすると少し笑い声をたてる等の変化はみられるようになった。目は合うようになってきた。足腰はしっかりしていないが赤ちゃんばさは少なくなると、歩くバランスもよくなってきた。
D子 DQ = 64	発語なし。表情もない。	人への関心をあまり示さず目も合わせない。あつめられるか。歩足はおぼつかず。歩足はできない。大きな音、早い動きを恐る。部屋では母親に抱かれていたり、ひとり立っていることが多い。	一人でボーとしていることが多い。玩具で遊ぶことは殆んどない。母親が相手をすると身体を動かす。特に好む遊びはみられない。	部屋では言葉はほとんどないが、相手をすると大きな声で笑うことが多い。返事はまだできない。喜びや楽しい時の表情が多くなってきており、明るい表情を多くみせるようになってきた。	目は合うようになってきた。少しづつ接触ももつようになる。最近では意識的にみられるようになってきた。足腰はおぼつかないが歩くようになり、歩行も少しづつ出てきた。かけ足も少しづつ出来、トランポリンにも恐がらずに乗るようになった。
E男 DQ = 50	呼ぶと返事はするが、言葉はあまり発しない。聞かれた物の指さしはする。表情が少なく、感情の表現も少ない。	自分から相手を求めていることは少ないが、相手をするとニコニコ応じる。足腰はおぼつかず。かけ足、早歩きはできない。動作がきこちない。周囲の動きはよくみていて、動作は遅いながらも本児なりに一緒に動くようにしている。集まりにもなんどか参加してくる。	動的な遊びは少ないが、果物カゴを持ち歩いたり、絵本をみたり、ブロックで遊んだりが多い。	指示に合わせて指さしはできる。名詞がほとんどであるが、単語で話す簡単な言葉でのやりとりもできるようになった。名前を呼ばれると返事もする。相手をすると笑顔がよくみられるようになった。	母親だけではなく徐々に関わりのお客を放つていっている。また自分からの積極的な関わりは少ない。
F男 DQ = 62	声はほとんど出さない。返事も手をあげるだけである。発音はほとんど聞かれず、簡単な指示などは理解し行動する。	目は合わせず、名前を呼んでも反応がない。皆と一緒に行動することは少なく、自分の気になっただけをする。やる気になれば平均台、とび箱、マット運動なども出来る。玩具をとりながらも抵抗せず。取り返すこともない。集まりでも離れがちである。自分から他の人のところへはいかない。相手をしようとするときその場から離れたり、気持ちを逃がすことを避ける。	絵本をみたり、小さな玩具を手で寝そべっていることが多い。ブロックならべなどをして遊ぶひとり遊びが多い。	あまり言葉はきかれないが相手をすると笑い声がよく聞かれるようになった。名前をよぶと目を合わせるようになり、両手をあげて「ハイ」と答えられるようになってきている。	積極的に関わりはもととうとしないが、Tのことは意識するようになった。ふざけることを喜ぶようになる。玩具をとられると相手を追うようになり、少しづつ自己主張を始めている。皆と一緒にする活動には参加しないことが多いが時折折加わるようになってきている。
G男 DQ = 74	名前を呼んでも返事はしないが下を向いて反応する。発音はほとんど聞かれず、単語も出ていない。意志表示は行動で行う。	自分からそっと関わりを持つとうとする。また、園子と遊ぶ。トランポリンなどの遊具を使った遊びは少ない。	玩具、絵本に関心を示し、ままごと、積木などでよく遊ぶ。スベリ台、トランポリンなどの遊具を使った遊びは少ない。	意志表現はことばでなく行動で示す。絵本などで指さして指示することはできる。	関わりを求める様子はみられ、少しづつ自分からも積極的になり、人との接触も指さなくなった。恥しがったり、照れたりして、やりたいのに行動できないといった様子である。しかし、少しづつ自分からやろうとする意欲もみせている。また以前のように大きな声や音に対する恐怖も少なくなってきた。足腰の不安定さはまだ残るものタイムングをとらえてジャンプや遊具にとり組むことも出てきており意欲的になってきている。

障害児保育における親の参加について

表3 父母の子どもの捉え方及び関わりについて

	父	親	母	親
A男		ごく自然に接している、平日接することができない分、土日には公園に連れ出すなどしてよく遊んでいる。自転車にも乗れるよう指導したり、言葉もカード(市販)をみせて、実際に触れさせて言わせている。その為かずい分言えるようになった。今はどういった玩具が適当かを考えているところである。体や運動機能は普通だと思いが言葉がない、一語文は出るが二語文が出ない、しかし大分進歩したと思う。母親がいなくても平気だった子が泣くようになり泣き回している。忙しくなかなか子どもと接する時間がないことを残念に思っている。		少しづつ言葉が出始めてきた時期だったため、集団の場で刺激を与え伸ばしていくこととする焦りがあった。しかし具体的にどうしたらよいかわからず戸惑っていた。グループへの参加に伴い子どもが順調に成長していくことが認められ、現在の状態もしっかりと受け止められるようになってきた。通室にも積極的になり、気持の整理がついてきた。
B男		子どものことはほとんど母親まかせ(決して無関心ではないが)、仕事柄(宿直が多い)子どもと接する時間は極めて短く残念に思っていた。本児に対してはあまり病的な感じもせず「そのうち何とかなるだろう」という感じだったがグループに参加し徐々に変化がみえてきたことを嬉しく思っている。言葉が一語文であるが大分増えてきている。子どもが動いているのをみるのは月2回位(仕事の関係で)のため、これではいけないと考えるようになった。無関心ではなかったのだが、通室するようになり出来るだけ接触する時間をもとうと心がけている。		不安そうな暗い表情でどう接して良いかわからず存在無げな状態であった。しかし母親同士の仲間付き合いをとうし、向向していた気持が少しづつ外に向い始め、子どもに体ごとぶつかっていく相手の仕方をするようになってきた。出来ないと思いついていたこともやってみれば出来るという気持をもって子どもに接し、自分の出来ることを精一杯やっていくこととする気概をもつようになった。B男の姉が母の支えとなっていることも多い、又一人で気負って頑張っていた状態から祖父母や夫とも子どもの現在の問題や、自分の気持を話し合えるようになり、協力して子どもに関わる体制が強固となり、気持も落ち着いてきている。子どもの現状をよく把握し、発達を促すよう努力している。
C子		今日のC子はあまり良くなかった様だが、帰る頃にはごきげんになっていた。自分の子どもが一審選れているような気がしたが「どの親もそう思うらしい」といわれ、自分の子どもに注意がいく為かとも思った。懇談では色々な話を聞き参考になった。“子どもは誉めて育てること”“父親は父親なりの関わり合いをもつ”ということ、これからも父親としてC子との関わり合いを大事にしていきたいと考えている。歩き始めが2歳すぎと遅く、言葉も現在喃語で「アーウー」としか喋らない。家では喋りかけてあげたりしている。水遊びやプールが好きなので毎日帰ってきても風呂に入れるようにしている。最近一つのものに興味を持ち始めたなどの変化を感じてきている。		自分の子どもより同室の他の子どもに向けられがちで、あまりC子の相手をする様子はみられず、どう接することが望ましいか解からない状態であった。しかし次第に保育室でも懸命に子どもの相手をするようになり、子どもの笑顔が増え母親への甘えが出てくるようになったことを母親自身が認められるようになったと同時に前向きに子どもの状態を受け取れ接することができるようになってきた。
D子		お互いに刺激し合いながら行なわれているのは良い指導方法であると思った。また子ども達の発達程度、年齢等似かよっており、一人一人を全体で引きあげていき易い集団であると思った。明るく元気という雰囲気は強くしっかりと子ども達を成長させる原動力にならと思った。懇談会では“ほめてやること”“聞く・見ると同時に行動すること”子どもへの働きかけは量より質であること”等参考になった。歩いたり、階段を昇ったりするようになったが、言葉はまだ数語という程度。グループに参加後、表情は出てきて、以前は話しかけても知らん顔をしていたが最近話しかけるとちゃんと見るようになり、コミュニケーションの始まりのようなことがみられるようになり、一生懸命働きかけてあげれば良い感じになっていくのではないかと思っている。		子どもの遅れを何とかしたいという焦りが見受けられた。色々な施設を見てまわり、最後に出会ったのが当グループで、ここで何とかしたいという気持に母親が振り回されている感じが強かった。グループの母親達との交流により、子どもの好む場所にいるということが母親に安心感をもたらし、気持を落ち着かせ、肩の力が抜けるようになってきている。出来ないと思っていたことでも努力すれば出来るということが解り、母親自身も明るくなってきた。あせる気持も薄らぎ、子どもの変化を楽しむ余裕も出てきている。
E男		近所に同年齢の子どもが少なく、まだまだ色々な面で心配なところがあるが、参観してみてE男は他の子どもとの接触が極端に少ないと思った。本やボールを取り合うこともない、近所に子どもが少ないことを考え合わせれば無理もないことであろう。本を読むことも大切だと思うが、折角の場なのでもっと動きがほしかった。日頃私が色々とうるさい為かかも知れないと反省している。言葉も少なく余り歩けなかった。言葉の方は進歩しように思うが、なんでもなくで躓いたりする。余り走ったりもできない。普段あまりかまっていられないが、一緒に出たりしなくてはいけないのではないかなと思うようになってきている。		出生後、子どもが入退院を繰り返し病弱であったこともあり、子どもへの対応に自信がもてなかった。祖父母の手助けを常に要し、母子だけの通室にも不安であった。しかし、子どもの足腰がしっかりとしてくるようになり、ほとんど歩いて通室できるようになり、オムツも取れ、母親の気持の中にやれば出来るという自信が生まれてきた。グループの活動にも積極的に参加するようになり、不安をのりこえ前向きな姿勢で取り組めるようになってきている。しかし、子どもの下痢・発熱が多く、その都度、不安になり悲観的になりがちである。
F男		マジックミラー越しに観ていると自分の子どもだけがどこにいても浮き出してみえる。幼少の頃の自分に比べ、F男の性格は良いのではないかなと思った。他の父親の話の聞き「なるほど」と思ったりした。ピクニックのような一日であった。親からみた“良い子”で、内に籠もるところがあったが、わかさきに通うようになり外に向かうようになり、親の言うことを聞かなくなった。これは良い傾向で、以前は親が少し支配しすぎっていたのかも知れないと思う。下の子が生まれた頃はいじけていることもあったが、最近はどうかがどうかわからない位同じレベルで付き合っているようところが、下と上が同じように発達していくのではないかとゆったりと構えている。		子どものことに非常に神経質になっていた。すべての面について、きちんとすることを要求し、気持の余裕がもてないようであった。そして子どもにとっては重荷と解っていても父親への気遣いが優先しがちであった。しかし子どもへの叱責より、ほめることを十分にするという気持で子どもに接するようになり、子どもの気持を考慮する余裕ももてるようになり、父親の理解と協力も得られるようになり、子どもの行動に自分自身の姿勢を重ねながら努力している。
G男		グループにだいぶ慣れてるよう楽しんで遊んでいた。子ども達の笑顔はいつ見ても気持ち良いものであり、遊びの中から多くの刺激をうけ、もっともっと大きく成長してほしいと思う。また家庭内ではなかなか出来ない経験をさせてもらえる機会を持たせたこと、その面倒をみている先生方に感謝している。6月には兄になるG男がどう進歩していくか楽しみにしている。以前に比べ、遊びたかから何や進歩しているのではと一安心したところである。		病気をもっているということも影響している為か、子どもが母親と離れられないと同様に、母親も子どもから離れられない。第二子出産を契機に距離をもって子どもをみる事ができるようになり、障害をしっかりと認識できるようになり、G男自身の成長・発達をみつめることが出来るようになってきた。

かがえる。また、いかに今日まで子どものことについて母親まかせにしていたかを反省する声や、母親と同様に、応答性や反応性の低い子どもにどう関わっていったら良いのかわからないといった状況などが父親の記録より看取できる。またグループの子どもの様子を観察する機会を得て子どもの問題や現在の状態が把握でき、子どもと積極的に関わっていくことの必要性を痛感するなど取り組みへの意欲も認められる。合わせて母親への援助や協力の重要性も認識している点にも注目する必要がある。子どもと母親との関わりやセラピストの行動を参観する機会を得て、更に自らもすすめていこうとしている様子がかがえる。また母親に対する協力体制をとる中で、子どもについての悩みや迷いを母親と共有できるようになり、夫婦で子どもの成長・発達を援助しようとする姿勢を強化していく様子や、更には祖父母・兄弟等も一体となって家族で問題に取り組んでいこうとする体制づくりがすすめられている様子がみられ、母親を直接的に援助しようとする意欲を十分に汲み取ることができる。但し、現実には仕事の関係上直接的な援助行動は不十分になりがちであるというギャップも否めない。しかしながら、父親のこのような協力的な姿勢の現れは直接的参加や援助行動に至らなくとも、母親に精神的な満足を与えるものであり、気持の安定に十分貢献していると考えられる。父親の協力的な態度は母親の安定感には不可欠のものであり、母親の援助行動を助長する一因になることを考えれば、意欲的な養育行動を喚起する重要なポイントになるとしても過言ではなからう。父親は子どもと接する時間は短いものの、その中で子どもとの関わりを持つよう努力していることや、他児の行動観察によって自分の子どもの問題点や現状を客観的にとらえることができること、更には観察を通して子どもの成長・発達を認めることができる点など多くの事柄が提起されている。それらを踏まえて父親としてどうあることが望ましいか、また今何を子どもは欲し、それにどう答えられるのかを自問自答するようになり、前向きで積極的な協力姿勢を養育契機となったことなど評価される点が多いといえよう。

IV おわりに

時間の経過に伴い子どもが成長・発達を遂げていくことは健常児であれ、障害児であれ同様の経過を辿るものと考えられる。但し、発達上の問題をもつ子どもや行動

の偏りのある子どもはその一つ一つの発達の過程をより具体的に我々の前に示してくれる。それは時には遅々として進まないという荷立ちと、停滞してしまうのではないかという不安感を養育者に抱かせることは否めない。しかし、そこには暗黙のうちに同じ生活年齢の子どもとの比較や健常な兄弟姉妹との比較がなされていることもまた事実であろう。障害児保育を考える時には保育の基本としての「個々の子どもの成長・発達の保障」を第一義としていくことが大切である。入室頭初にみられる母親や父親の不安や焦りの根底には常に「普通の子ども」という枠組が存在し、そこに追いつくことを目標としてかなりのエネルギーを注いでいるように見受けられる。つまり健常児イコール良い子、問題をもつ子どもイコール好ましくない子といった価値観が存在するのではなからうか。障害児保育の実践に当ってはこの価値観をまず切り崩し、保育本来の「個々の子どもにとって」という視座に基づく発達の保障を中心に、障害もその子どもの個性と見做すところまですすめていくことが大切である点を十分に認識し、援助行動を実践していく必要がある。母子同室や父親参観といったこともこれらの考えを具体化したものとして意味づけることができる。事実母子同室により母親も保育に参加することを通して子どもの問題を正しく理解し、心理的な安定も得て、子どもへの援助行動をすすめられるようになっていく。また父親も即行動化がはかれないまでも参観前と参観後では子どもへの関わりや捉え方が異なり、子どもや母親を援助し支えることについて出来る限りの努力を措きまいようになるといった方向に変わった。このような養育者の態度の変容は子どもが成長・発達を遂げていこうとする時の促進要因になることは必至であろう。発達遅滞を呈する子どもも人との関わりに問題をもつ子どもも、集団活動を通して人と関わることの楽しさや喜びを体得し、養育者や保育者との安定感のある関わりから自らも積極的に関わろうとするように変化し、大人とのやりとりが生ずるようになり、その中から社会生活上の様々な事柄を学習していくものと期待出来る。子ども自らが関わりの要求をもち、具体的な行動に示す段階へと導いていくことが子どもの成長・発達の促進につながると言えるのではなからうか。そしてこのような関わり行動がもてるようになる為には、まず安心して自分自身を発揮できる場の確保が必要である。家庭や母親がその役割を担っているが、それを十分に進める為には母親の心理的な安定感の確保

と家族の協力が重要となる。また直接的間接的な援助者としての父親・祖父母等の役割も決して忘れてはならない。合わせて、具体的な行動やモデルの呈示を提供する治療保育場面での活動も側面からの援助を与える重要な位置にあるといえよう。

障害児グループへの参加はとりもなおさず子どもに問題があると母親が自ら認知することにつながる。それは今まで単にことばの遅れだけ問題にしていた母親に大きな動揺を与え、障害児を生んだという自責の念にかられなかなか問題の本質を理解するには至らない。このような状況にいる母親にとっては、グループへの参加が可能になることが第一段階であり、参加を通して様々な情報を整理しながら、子どもの現状を理解し受けとめることのできるようになるのが第二段階、更には将来を見通し、現在必要な援助行動を実践できるようになることが第三段階と大きく段階づけることができよう。そして子どもと向きあった取り組みがなされるようになると発達を遂げていく子どもの行動に、一喜一憂しながら母親自身も成長していくのである。子どもを伸ばすには母親を育てることであり、母親が育つ時は子どもが伸びる時でもある。これが母子同室グループによる障害児保育の活動を通し実感される点であり、ここに、このような形での保育を継続していく意義があるように思われる。今後共、問題をもつ子ども達の成長発達を援助する上に父母の協力が欠かせない点を踏まえ、グループとしての活動をより有効に機能させていく為にはどのような点に留意すべきかを更に検討していきたい。

注

- 1) 松田博雄・三上君子：障害児の早期発見，早期療育について 第35回日本小児保健学会講演集（広島）1988
- 2) 芝辻益子・上野己美子・金平文二・巷野悟郎・後藤嘉余子・鈴木裕子：障害のある幼児の保育効果について（Ⅱ）日本保育学会第42回大会研究論文集（東京）1989

参 考 文 献

- 上垣内伸子・古屋喜美代・市川奈緒子・山崎聡子・竹中美香・鈴木はる奈：1歳6カ月健診経過観察における遊びグループ指導の展開 日本保育学会第42回大会研究論文集（東京）1989
- 嶺村法子：母親の障害児受容～危機とその克服～ 日本保育学会第42回大会研究論文集（東京）1989
- 毛呂千恵・岩堂美智子・新平鎮博・辻本久子・西川千晶：言語発達に遅れのみられた子どもと母子教室 大阪市立大学児童・家族相談所紀要第5号（大阪）1988
- 坂本歩・松島恭子：極度の母子分離不安を示した4歳男児の遊戯療法 大阪市立大学生生活科学部紀要・第36巻（大阪）1988
- 佐藤希恵・長瀬又男・稲垣美智子・沼崎千枝子：東京都小平保健所における三歳児健康診査の事後指導について 第35回日本小児保健学会講演集（広島）1988
- 林もも子：「おうちの中」から「おうち作り」へ 東京大学教育学部心理教育相談室第11集（東京）1989
- 沢崎俊之：Kちゃんの母親との面接 東京大学教育学部心理教育相談室第11集（東京）1989